

## 病害

うどんこ病：新葉に発生し、白粉をまぶしたような状態になる。主に葉の裏につくが、両面に発生することもある。葉はねじれたり、奇形になったりする。

防除期は春期から初夏、秋期。

カエデ類、カンバ類、ハンノキ類、ケヤキ、シンジュ、サクラ類、ポプラ、ナラ類、ヤナギ類など

(主な防除法・薬剤)病落葉の除去・焼却、ベンレート水和剤 2000 倍液、石灰硫黄合剤 60～120 倍液(冬期)、ポリオキシシン 1000 倍液の散布

一般的にうどんこ病は苗木ステージに多い。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

萎縮病：春先から発生して枝・幹を侵し、その侵された部分から急に萎れる。防除期は早春。

カエデ類など

(主な防除法・薬剤)病落葉の除去・焼却、キノンドー水和剤、オキシンドー水和剤を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

がんしゅ病：枝・幹にコブができる。コブが枝・幹を一周するとその上部は枯死する。正しい枝打ちを行うと、病気は避けることが可能。防除期は発病初期。

トドマツ・エゾマツ・トウヒ類、サクラ類、トチノキ、ポプラなど  
(主な防除法・薬剤) 被害部の除去・焼却、クロールピクリン、サンヒュームなどによる土壌消毒を行う。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

こうやく病：枝・幹に不規則なこうやくを貼ったような病斑が出る。病気にかかった枝は衰弱する。カイガラムシと共生することが多い。防除期は春～秋期。

ケヤキ、サクラ類など

(主な防除法・薬剤) カイガラムシを除去する。冬期には石灰硫黄合剤 10 倍液を散布する。



写真出典：樹木別でわかる病害虫全科 / 誠文堂新光社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

黒脂病：7～8月頃、葉の表面に少し膨れた円形の黒色病斑ができる。紅葉期に病斑の周囲が緑色になる。防除期は開葉前。

カエデ類

(主な防除法・薬剤) 病落樹の除去・焼却、キノドール水和剤、オキシンドール水和剤を散布する。



写真出典：樹木別でわかる病害虫全科 / 誠文堂新光社

さび病：葉に黄色あるいは褐色のかびが生じて、さび色を呈する。患部が肥大し奇形になるもの、てんぐす状になるものなどいろいろな病徴を示す。防除期は早春～10月下旬。

マツ類、カイズカイブキ、ポプラ、ヤナギ類、アジサイ、ウツギ類

(主な防除法・薬剤) 落葉樹の除去・焼却、石灰硫黄合剤15倍液を散布(冬期)、ダイセンステンレス500～1000倍液を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

先枯病：当年生枝が被害を受け、毎年被害を受けると枝がほうき状になる。防除期は早春。

カラマツ

(主な防除法・薬剤)被害部の除去・焼却、シクロヘキシミドによる処理を行う。



写真出典：北海道立林業試験場 HP

紫紋羽病：根の表面に紫褐色の糸状の菌糸束がからまり、地際部を紫褐色のフェルト状の菌糸層がおおう。根が腐敗して、数年かかって枯死する。

マツ類、カエデ類、ケヤキ、サクラ類、スズカケノキ、アカシア類、ハルニレ、ポプラ、ユリノキなど

(主な防除法・薬剤)初期では被害部を切取り、石灰乳を塗る。被害が進行している場合、木を引き抜いて焼却、クロールピクリンで土壌消毒する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

炭そ病：葉、幼梢および果実を侵す。病斑は不整形の大きな斑点としてあらわれる。

葉は勢いがなくなり早期落葉する。防除期は早春～秋。

エンジュ、スズカケノキ、アカシア類、ポプラ、ヤナギ類、ユリノキ、アジサイ、マサキなど

(主な防除法・薬剤) 被害部の除去・焼却、ダイホルタン水和剤 1000～1500 倍液の散布、石灰硫黄合剤を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

胴枯病：太い枝や幹が侵され、被害部はやや陥落して明瞭な黒色病斑となる。表面はサメ肌状になる。病斑が幹を覆えば樹木は枯死する。

トドマツ・エゾマツ・トウヒ類、カエデ類、カンパ類、ハンノキ類、サクラ類、スズカケノキ、ナナカマド、ナラ類など

(主な防除法・薬剤) 被害部の除去・焼却、石灰硫黄合剤 7 倍液を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

すす病：葉や茎の表面がすすをつけたように黒くなる。この病気のため木は枯死することはないが樹勢が衰える。黒土を使用すると出やすい。

ヤナギ類、ツツジ類

(主な防除法・薬剤) カイガラムシ、アブラムシ類を駆除する。ベンレート 2000～3000 倍液を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

てんぐす病：枝に小枝が多数病生し、ほうき状あるいは大きな塊状を呈す。樹勢は著しく衰える。防除期は冬期（休眠期）。

トドマツ・エゾマツ・トウヒ類、マツ類、カンバ類、ハンノキ類、サクラ類、アカシア類、ナラ類、ツツジ類など

(主な防除法・薬剤) 被害部の除去・焼却、キノシドー水和剤、オキシシドー水和剤 400 倍液を散布する。



写真出典：第 2 回現地講習会

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

とうそう病：葉枝、幼茎および果実に褐色の病斑を形成し、やや隆起してかさぶた状を呈する。防除期は開葉期～盛夏。

ケヤキ、ポプラ、ヤナギ類、ハギ、マサキなど

(主な防除法・薬剤) 被害部の除去・焼却、冬期には石灰硫黄合剤を散布する。



写真出典：樹木別でわかる病虫害全科 / 誠文堂新光社

もち病：葉の表面や枝に発生、被害部が拡大して白色のモチ状となり、光沢を失う。のち褐色になって腐敗したり、ミイラ状となる。防除期は5～6月。

ツツジ類

主な防除法・薬剤) 被害部の除去・焼却、石灰硫黄合剤 50～60 倍液を散布 (冬期～春先) キノンドー水和剤、オキシンドー水和剤 500 倍液を散布する。



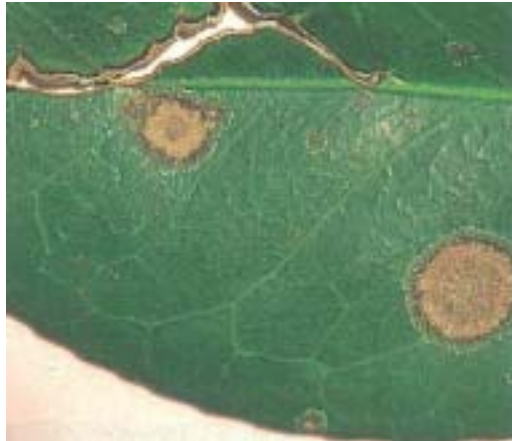
写真出典：原色樹木病虫害図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

白も病：葉の両面、とくに表面に多く発生する。放射状の紋様を生じ円形か不整形をなす。表面は褐色から黄褐色を帯びてやや盛りあがる。発生が多い時期は5月～。

イボタ

(主な防除法・薬剤) 被害部を除去・焼却、キノンドー水和剤、オキシンドー水和剤 400～500 倍液を散布する。



写真出典：樹木別でわかる病虫害全科 / 誠文堂新光社

白絹病：枝と幹の地際部が侵され、葉は黄色に変じて枯死する。根頭部から根にかけて白色、絹糸状の菌糸がからまりつく。防除期は発生初期。

ハギ、アカシア類

(主な防除法・薬剤) 被害部の除去・焼却、コブノン粒剤、サンヒューム、クロールピクリンなどで土壌消毒を行う。



写真出典：原色樹木病虫害図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること



斑点・褐斑・斑紋・葉枯病：

いずれも葉に病斑を生じ、病斑点に小粒黒点がみられ、病斑の多くは褐色を呈する。防除期は4～10月。

（褐斑病）カンバ類、ハンノキ類、ケヤキ、サクラ類、スズカケノキ、ハルニレ、マサキなど

（斑紋病）ポプラ

（斑点病）ツツジ類

（主な防除法・薬剤）病枯葉の除去・焼却、石灰硫黄合剤の散布（冬期）、キノドール水和剤、オキシドール水和剤 400～500倍液を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

## 虫害

カイガラムシ類：大部分のものはカイガラをまっており、吸収性の口器をもって植物の汁液を吸う。年1回発生のもが多く、雌成虫で越冬する。卵はカイガラの下に産みつけられ、ふ化した幼虫は他へ移動しカイガラを作り定着する

イチイ、カエデ類、サクラ類、ナナカマド、アカシア類、ポプラ、ヤナギ類など

(防除期) 12月～2月

(主な薬剤) スミチオン乳剤、マラソン乳剤、ジメトエート乳剤 800～1200倍液を散布する。

カイガラを作った後は石灰硫黄合剤7倍液を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

アブラムシ類：成虫、幼虫は植物の汁液を吸収し、生育をさまたげる。種類によっては葉をまいたり、虫えいを作るものもある。不完全変態を行い、年に数世代を営む。夏から秋の高温期には雌だけが繁殖し、しかも卵は雌体内でふ化し、幼虫まで生まれる。たいていのものは卵で越冬する。

トドマツ・エゾマツ・トウヒ類、マツ類、エンジュ、ケヤキ、サクラ類、アカシア類、ヤナギ類ツツジ類など

(主な薬剤) マラソン乳剤、スミチオン乳剤、エストックス乳剤 1000～1500倍液を散布する。ダイシストン粒剤を一本当たり5～10g施用する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

ミノガ類：きわめて雑食性で多くの樹種に被害を及ぼす。年1回の発生。成虫は5～6月頃発生し、雌がミノの中に産卵。卵はまもなくふ化し、新幼虫は葉を食いながら成長し、そのまま越冬する。

アカシア類

(防除期) 6月下旬～8月、ミノごと取り捨てる。

(主な薬剤)ディプレックス乳剤 1000 倍液、エルサン乳剤 1000～1500 倍液、スミチオン水和剤 800～1200 倍液などを散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

イラガ類：幼虫はきわめて雑食性で各種樹木の葉を食害する。年1～2回の発生。越冬幼虫は5月にサナギになり、6～8月に羽化する。その後マユを作り越冬するが一部は8月中旬～下旬に羽化する。

カエデ類、サクラ類、スズカケノキ、ツツジ類など

(防除期) 5月中旬～8月

(主な薬剤)ディプレックス乳剤 1000 倍液、エルサン乳剤 1000～1500 倍液、スミチオン水和剤 800～1200 倍液などを散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

シャチホコ類：幼虫は葉を食害する。年1回(4～6月)の発生で、サナギで越冬する。

ポプラ

(防除期) 5月～7月

(主な薬剤) D D V P (サクラに葉害あり)、ラピック、ホスピット  
1000～2000倍液などを散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

ハダニ類：主として葉に寄生し、汁液を吸収する。被害跡は白く点々と残り、発生が多くなれば葉は変色する。種類によって生態は多少相違するが、いずれも年に10世代以上くり返す。一般に夏期に多く発生し、特に乾燥高温の年に多い。

カイズカイブキ、トドマツ・エゾマツ・トウヒ類、マツ類、ケヤキ、  
ツツジ類など

(防除期) 4月～5月、7月～10月

(主な薬剤) ケルセン乳剤 1000～2000倍液、モレスタン水和剤 1000～  
2000倍液、アカール 45・338 1000倍液、エストックス乳  
剤などを散布、ダイシストン粒剤を土壌施用する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

コガネムシ類：成虫は地中に生息していて植物の根を食害し、苗木や幼令木を枯死させる。

カラマツ、トドマツ・エゾマツ・トウヒ類、サクラ類、ヤナギ類  
(防除期) 6月中旬～9月中旬(特に8月上・中旬)  
(主な薬剤)ディプレックス乳剤 1000 倍液を散布する、ダイアジノン粉粒剤やデナポン水和剤を施用する。



写真出典：樹木別でわかる病虫害全科 / 誠文堂新光社

キバガ類：幼虫は葉をつづる種が多いが、植物体の種子、根径、葉肉などにもぐるものも多い。

カイズカイブキ  
(防除期) 5・7・9月(特に7月)  
(主な薬剤)スミチオン水和剤、ディプレックス乳剤、パダン水溶液などの 1000 倍液を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

コウモリガ類：幼虫が主として幹の根際を食害する。はじめは環状に、のち内部へと食い込む。患部は褐色のブヨブヨしたものが出てくる。一世代の完了に2年くらいかかる。

ポプラ

(防除期) 4月

(主な薬剤) 材中のものについてはスミチオン乳剤 300～500 倍液を注入して駆除する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

ハムシ類：幼虫、成虫ともに葉を食害する。大発生時には樹幹や枝の薄皮部を食害することもある。

カンバ類、ハンノキ類、サクラ類、ヤナギ類、ポプラなど

(防除期) 5月～8月

(主な薬剤) スミチオン水和剤 1000 倍液などを散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

メイガ類：幼虫は葉肉内に潜入して食害するもの、葉をつづり合わせて食害するものがある。年1～2回発生。サナギで越冬するものが多い。

ムクゲ

(防除期) 5月～7月

(主な薬剤) ディブテレックス乳剤、エルサン乳剤、スミチオン水和剤などの1000～1500倍液を散布する。



写真出典：樹木別でわかる病虫害全科 / 誠文堂新光社

ハマキムシ類：幼虫は葉をまいたり、つづり合わせてその中に住み、付近の葉を食害する。幼虫で越冬し、春になり成虫があらわれる。年4～5回発生するが、晩春から夏にかけて多い。

マツ類、ツツジ類など

(防除期) 4月上旬～5月上旬、6月中旬～8月下旬、9月下旬～10月下旬

(主な薬剤) ディブテレックス乳剤、スミチオン水和剤の1000～1500倍液、ディナポン水和剤800倍液などを散布する。



写真出典：原色樹木病虫害図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

ゲンバイムシ：植物の葉、まれには茎から汁液を吸う。この種が寄生すると、その部分の葉緑素が分解され、特有の白斑があらわれる。

ツツジ類

(防除期) 5月～7月

(主な薬剤) ダイシストン粒剤などによる土壌処理剤の施用を行う。  
発生後はスミチオン乳剤、ダイアジノン水和剤などの  
1000～1500倍液を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

クスサン：幼虫が葉を食害する。年に1回の発生。卵で幹や下の主枝のまたで越冬する。4～5月頃成虫があらわれ、加害の最盛期は6月初旬～中旬、成虫は秋に出現する。

(防除期) 4月～6月上旬

(主な薬剤) ディプテックス乳剤、DDVP、ラピック、スミチオン乳剤などの1000～2000倍液を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること



カミキリムシ類：幼虫（テッポウムシ）が樹皮下や材部を食害する。カミキリムシの被害を受けた木は枯死するか、しないまでもその生長は著しく阻害される。不健全木に穿入しやすい。

カエデ類、ケヤキ、サクラ類、ヤナギ類、スズカケノキなど

（防除期）6月～7月

（主な薬剤）材中のものについてはエルサン乳剤、スミチオン乳剤などの500倍液を注入し駆除する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

シンクイムシ類：ふ化した幼虫が新梢、球果や樹幹に食入加害する。害を受けた新梢は枯死するため、その生長は阻害され、害球果は褐色となって枯死し、結実しないことが多い。

カイズカイブキ、マツ類

（防除期）4月下旬～7月

（主な薬剤）スミチオン、サリチオン水和剤または乳剤の1500倍液を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注）薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

ケムシ類：幼虫が葉を閉じ合わせ、その中に住み、植物の葉、心部、花、つぼみなどを食害する。

カラマツ、マツ類、スズカケノキ、ハルニレ、ナラ類など

(防除期) 5月～8月、ドクガは徹底駆除する。

(主な薬剤) スミチオン乳剤、ディプテックス乳剤、サリチオン乳剤などの1000倍液を散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

マツクイムシ類：樹皮下や辺材部を穿孔し、食入加害し、樹木を衰弱させて枯死させる。

カラマツ、トドマツ・エゾマツ・トウヒ類など

(主な薬剤) パインテックス乳剤、ダイアエターン乳剤、スミバーク乳剤などを散布する。



写真出典：原色樹木病害虫図鑑 / 保育社

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること

ハバチ類：幼虫が葉を食害する。樹木自体枯死に至る例は少ない。

カラマツ、トドマツ・エゾマツ・トウヒ類、ポプラなど  
(主な薬剤)スミチオン乳剤、ディプテレックス乳剤などの 1000～1500  
倍液を散布する。



写真出典：樹木別でわかる病虫害全科 / 誠文堂新光社

#### その他

- ・ 寄生植物であるヤドリギ〔ヤドリギ科〕は枝ごと切除する
- ・ 所々樹種を変えて単一樹種を避けることで、病虫害の拡大を防ぐことが可能である

#### 鼠 害

- ・ 鼠による被害を受ける樹種は、トドマツ、アカエゾマツ、ヨーロッパトウヒ、カラマツ等の針葉樹と、広葉樹ではヤチダモ、シラカンバ、サクラ類、ヤナギ類、ニセアカシヤなども被害にあうことが確認されている
- ・ 被害をもたらすのはエゾヤチネズミである
- ・ その対策は生息しにくい環境をつくることで効果があり、下草刈り〔実施時期は秋〕が有効である
- ・ 薬剤防除の方法もある

注) 薬剤散布量は病気の程度によって異なるため、状況を見極めて散布量を決定すること